

緑 埜 晩 秋

田 辺 幸 雄

緑埜の地をこの足に踏んでみたいという気持は、かなり以前から私の胸中にあつた。上野国南端のこの一角は、六世紀の前半にあつて、ただならぬ歴史の刻印をその地表にめりこまされた処である。私はどうしてもその跡に立つてみたかつた。

……安閑天皇（五三四）……武蔵国、造笠原直使主。与小柁相争。相争有逆。皆名也。小柁経年難决也。小柁性阻。而謀殺使主。使主竟之走出。詣京言状。朝廷臨断。以使主為國造。而誅小柁。國造使主。喜交懷。不能黙已。謹為國家。奉置横澤。橘花。多氷。倉櫟。四処屯倉。是年也大歳甲寅。

当時大和朝廷の東国政策は着々と歩みを進め、関東の南半を握つて後、その手を次第に北方へ向かつてひろげはじめていた。北のどんづまりには高い山々を背後に負うた肥沃の毛野の国がある。東国随一の独立国たるその毛野へ、じりじりと迫つてゆく態勢が、このころとられていた。ここに引用した日本書紀の文章は、そのような状態を背景として見る時、まことにいきいきした息吹を私たちにふきかけてくれる。今日の埼玉県と東京都と神奈川県の一部とにわた

つていた往時の武蔵国が、このころ、どういふ管理の下におかれていたかは、まことに興味をそそる問題だが、はつきりしたことはわからない。ただ万葉時代のように律令制下の大和色そのものといった状態でなかつたことだけはたしかだ。おそらくかなり古い伝統を持つ北方の毛野の国と、西南からぐんぐん進出して来る大和政府との間にはさまれて、右せんか左せんかに迷いつつ、大和への協調派がわずかに優位を占めるに至つた、というような状態ではなかつたかと思ふ。そして笠原使主と笠原小柁とは、その三つの立場を代表していたわけだ。

勝てば官軍敗れば賊軍である。小柁は当然大和側から悪く見られる。筆者から「性阻有逆」というひどい書き方をされてしまふ。だが小柁が、自分の力だけではどうにもできぬ国造の地位をめぐつての抗争にあたつて、援を上毛野君小熊に求めたのには、それだけの理由があつたらう。小熊を頼るに足る人間と考へた、というよりは小熊によつて統率されていたらしい毛野の国の実力を身近に感じていた。といった方が当つているかも知れない。そしてこれは、おそらく武蔵一帯に住む人間の、古くからの、誰の頭にも一応は浸みこんでいた考え方であつたようだ。それに対し相手の使主は大和政府に泣きつくことを考へた。書紀の文章にあるように、小柁

がはじめに毛野の国と結んで使主を殺そうと謀つたから、逃げ出して京に至つたのかどうか、これは怪しい。或いは順序は逆だつたかも知れぬ。だがそれはどちらでもよいことであろう。大和へ泣きつくという手が、この時の武蔵にとつての、一つの新しい方向として多くの支持を得たということ、それは自分たちの将来を賭けた大投機であつたことを理解しておけばよい。

「朝廷臨断」という句が、具体的にどの程度の真実性を含んでいるかは、まことに心もとない気がする。武蔵国という中央舞臺で毛野と大和との兵力のぶつかり合いが実際にはげしくおこなわれたか、或いは政治的折衝の結果小杵の処刑が決定したか、これも不明だが、ちよつとした小ぜりあいぐらひはあつたのではないかと推測する。とまれ結果的には大和側が強く押し切つて、小杵は誅せられ、それを後援した上毛野君小熊には手厳しい要求が大和側からつきつけられたはずである。使主はこの文面のように、かしまり喜んであるうが、喜んでばかりはいられないなかつた。「不能黙已」とは、いくら官吏編纂者の筆とはいへ書きも書いたりだ。大和側から屯倉は少くとも四処を差し出せ、さもなくば……とやられて青くなつたのではないか。勝たしていただいたのはありがたいが、四つの屯倉を引き抜かれたあとの武蔵国造とは、なんとありがたいくない……こうと知つたら初から援助を大和に乞うなどしなればよかつた、と泣きべそをかいて四屯倉讓渡証に捺印したのではなかつたか。四つのうち、横濱は横見郡の地、橘花は橘樹郡と言われるが、多氷は多摩とも大井とも言われ、倉標は久良岐かと考えられる。とにかくそれぞれに重要な地だつたわけだ。この事件の結果、武蔵国は大きく大和色に染めあげられたといつていいだろう。その翌年である、緑埜が書紀の文面にあらわれて来るのは。

二年(五三五)五月丙午朔甲寅。置筑紫種波屯倉。鎌屯倉……と「種波」以下二十六の屯倉設置が記されているが、この終から二番目の所に「上毛野国緑野屯倉」の名が記されているのである。武蔵国造が大和政府に四屯倉を奉つた翌年のことである。これが前年の事件によつて課せられた毛野の国へのお仕置であることはあきらかであろう。緑埜は毛野の国全体から見れば、その南端を占める小区域に過ぎないかも知れぬ。けれども大和政府がこの地の屯倉を管理することの意味は重大であつた。少しくいや味な言い方をすれば、ここに第一の楔を打込み、これを橋頭堡として、大和政府は毛野の国を服属の方向へ向寄せたのである。毛野の国が独立を失つた時期はいつか、それははつきりしない。石井良助氏(「大化改新と鎌倉幕府の成立」)のように、これを大化の時とするのは遅きに失するようだから、六世紀の終ごろと考えるのが、至当かと思うが、いずれにしても、この緑埜屯倉設置の五三五年を境として、毛野の国は色あせた存在となつたに違いないのである。

平安初期の倭名抄を見ると、上野国の処には、碓氷郡に八つの郷の名が記され、片岡郡五郷、甘楽郡十三郷、というように、十四の郡の名があげられ、それぞれに属する郷名を並べている。多胡郡と那波郡との間に緑野郡は記され、ここに林原、小野以下十一郷が列挙されている。緑埜という名の郷はない。この緑野郡は明治二十九年まで存したが、その時多胡郡の合併して現在の多野郡となつた。書紀の緑野は多分郡名としての緑野であろうが、五三五年といえは大化の百十年前、郡という考え方がはつきりしていたとは言えないから、後の緑野郡に当る地方を漠然とさしていたものと見てよからう。つまり、鐺川、鳥川、神流川によつて北及び東を限られ、西は甘楽郡に、南は武蔵国と山岳地とに接する、そのほば中央に鮎川の水を北流せしめている上野国南端の地である。



鮎川から見た西御荷鉢山

安閑天皇二年に屯倉をおいた地が、現在のどこに當るかにつき、地名辞書は、浄法寺の南八塩の地に御倉御子神社という小祠があるから、或いはそこか、といい、又、板倉という字の名は屯倉の穀蔵などに關係があるか、とも述べ二つの候補地をあげている。ところが藤岡市の西方、平井村の字名に綠整（きよととのり）という名が残り、その綠整の西に接して上記の板倉部落が並んでいることは、私の心を強くひきつける。何々村という村名は明治以後のものが相当多いが、字の名はずつと古いものが大部分だ。今の字綠整の地は鮎川に沿い、郡の一中心をなしていたと言えなくもない。そこに板倉の名があるのだから、どうしても此處ではないかと考えたくなつて来る。所詮は決められぬにしても、二説のうちいずれかとなれば、私はこちらを探りたい。出かけてゆくなら、この綠整の地にしたい……以上が私をこの地に駆り立てたあらしの事情であつた。

昭和三十六年十一月二十三日の日曜はからりと晴れた。自宅からバスで保谷駅。そこから西武線で栗飯茶まで。さらに八高線に乗りかえて藤岡につき、午前十時発の駒止行バスに乗りこんだ。広くもない街を出はずれると、近くの丘陵をつつむ見事に紅葉した闊葉樹林が、午前の陽にきらきら輝いてまことに美しい。杉林の青黒い色がこれまたあざやかだ。東平井からは直角に右折して、桑畑野菜畑の間を揺られながら、綠整部落に近づいた時、久々に心の躍るを覚えた。

美しい川水のきらめく鮎川を渡つて綠整部落に入り、小学校の前で下車する。休みで人影の見えぬ学校の近くに、農家や雑貨屋などが少しくかたまつた、静かな村である。ゆるい斜面にひそがつた畑と水田、背後の紅葉した雫木山。そしてからりと晴れた西南の空を限る西御荷鉢山（二二八メートル）の峰頭がまことに印象的だ。

バスがかなかな坂をあげて走り去ると、澄み切った秋の空気が、ひとりとぼつちの私の身をびつたりとつつんだ。ふらふら歩きながら鮎川の橋まで戻る。欄にもたれて上流を見る。右側がお宮のこんもりした木立。左の方は平らな河原のような処に、かなり丈高い闊葉樹林があつて、中央を、すくつて飲みたくなるように清流な、というよりは晩秋の明るい日ざしにかなかな黄色味を帯びているようにも見受けられる浅い流れが、さざなみを立てている。その川の正面奥に、もつこりと黒い頭を持ちあげた西御荷鈴山が控えているわけだ。その山を私は或る情感をこめてしばしば見つめる。その「或る」には後程ふれることにしよう。とにかくことはまとまつた美しい風景だ。きよらかで和やかな感じがたまらなくいい。

欄を離れて傍の丘の上のお宮に登る。五万分の一の「高崎」に神社記号のある所。この森からは、部落の屋根を越して遠く北に望まれる椋名火山の姿がわるくはない。東歌の伊香保ろだ。お宮から南の方に歩き、畑の間を西に横切り、部落西南の丘に立つてみる。山を切崩して、ここに何かを建てるらしい。先程の小学校が小さく見えるが、その緑蔭部落の向うには、関東平野が広々と開け、先程の椋名山の右に、赤城山がゆたかな裾を左右に張っている。東歌のくろほの端ろに擬せられる山。そしてその二つの間の奥に子持山が顔を見せるのだが、これはここからは少々遠すぎる。なかなか景勝の地だし又聖吉の地でもあると思う。屯倉設置の時、大和政権からはじめてこの地へ乗りこんで来た連中は、どのあたりで、先ほどの鮎川を渡つたであろうか、などと思いは六世紀の昔に飛ぶ。正午を知らすどこかの工場の汽笛が遠くひびいて来た。

板倉部落のわきを通つて小学校前まで戻つたが、バスがかなかな来そうもないので、まっすぐ北へ走る新道を歩く。藤四から吉井町



南西から板倉・緑蔭を見る

への街道と交叉する所に「種荷山古墳」という標識があつたので、その所在を尋ねるとすぐに教えてくれた。前方後円墳だということ。かなり長く続く村の人家の間を北にまっすぐ突き抜けて、左がからりと開けた処に、その高まりがあつた。地図の一・二七メートル三角点の丘だ。小さい川の向う岸に、ちよつとした崖を示して、三、四十メートルの高さに盛りあがつている。これは自然の隆起だろう。もしこれが古墳だつたら仁徳陵よりずっと高いではないか、まさかこんな壮大な古墳が東国の果にあるはずはない、それにしても頂上に石碑のようなものが見えるが……とふしぎがりながら橋をわたつてその斜面を上り、北原部落の南端に出、台地の上からその石碑のある隆起を見ると、なるほどとわかつた。たしかにこれは前方後円墳だ。その築造位置を川に臨む台地の突端に設けたために、川向うの下側からは、崖の上の自然の隆起のように見えたのである。前方部にあがつてみる。かなり高い土盛りだ。北が前方、南が後円で、その長さは百メートルをちよつと越えるぐらいであろう。前方部の頂に後藤守一氏の書かれた解説文が碑にきざまれている。五、六世紀のもの、相当な豪族の墓、周囲から埴輪その他も出た、というようなことが述べられていたが、読み終つた私は、このまったく予期せずにはいた古墳の上に立ちつつ、わくわくする胸を自分でしずめるのに努めるような状態だつた。

高まつた前方部は雑草に立木がまじつているが、後円部は耕されている。しかも後円のやわらかい隆起が畑のままによく示され、この古墳の輪廓をはつきり示している。大和方面の大物に比べるとは気の毒だが、東国としては相当りつばなものといつていいだろう。特にすばらしいのは、この石碑のある頂からの大観である。今歩きまわつて来た緑埴部落は南二キロの近さにくつきりと見え、その右奥に御荷鉢連山がかぶさつている。そこから右の方に山脈を見渡し

てゆくと、平坦な頂稜の両側をすばつと切り落とした荒船山。その右のすつと奥の円錐頂から右になびいているのが、信濃なる浅間の岳に立つ煙。やや近く岩のごつごつした妙義山。そして伊香保ろ、子持山、くるほのねろが北正面に堂々と並び、東北へまわると日光連山の中に一きわ目立つ男体山。山脈はそこから低くなり、ずつとづついで一度切れたあたり、ほぼ真東に、くつきりと双耳峰を目立たせたのが、常陸の筑波嶺だ。一面に広い平野、近く白い河原、紅葉した丘、森、村落。恍惚としているうちに時はすんずんたつてしまう。

この壮大な古墳の下に眠つているのは、どういう人間だろうか。五、六世紀とすれば、緑埴屯倉設置の五三五年と結びつ可能性もあろうというものではないか。大和側から来て住みついた一類の統率者か。或いはそれ以前にここを領していた毛野の国の、特に上毛野氏の一族の誰かのものか。かりに前者だとしてみると、五三五年にここに屯倉を開いて管理しはじめてから、毛野の国が滅びるまでの数十年間、彼等はここから徐々に上毛野の中央部へ進出しようとしていたであろうから、この前方部が北を睥むような形で盛りあげられていることには、そうした心のあらわれがないとも言えない。後者だとすれば、南の方角からひしひしと近づいて来る大和政権の進攻を肌を感じながら、この緑埴の地だけは何とかして守りぬこうとしていた六世紀初頭の一人の英雄の趣なども思い描かれる。いずれにしても、歴史の激動の中をそれなりに強く生き抜いた一人のボスがこの下に眠つているのである。いや、いずれにしても、この偉大な墳墓の土盛りのためにもつこをかつがされた数百の農民たちは、苛酷な強制労働に疲れ果て、監督者のきびしいむちに、ふたたび立ちあがつて、力なく土を運びつづけたことであろう……。

この見事な前方後円墳の存在によつて、緑荳部落から板倉及びこの附近が緑野郡の中心であり、おそらく屯倉のおかれた地であろうという気持は、いよいよ私に強くなつて来たのであるが、さて、この地と東歌との関連はどのように考へることが出来るであろうか。もとよりこの一角からは伊香保ろもくろほの嶺ろも見えるから、それらを歌う諸歌がこの地にも歌われたらう、と見られぬことはいない。だがもつとこの地に密接に結びつく歌はないか、となると、私は次の一首を持ち出すことになる。

多胡の嶺に寄せ綱延へて寄すれどもあに来やしづしそのかほよき(三四一一)

多胡は和銅四年(七一)に設けられた郡名で、今の吉井町を中心とする、比較的狭い範囲の地だが、この歌の多胡の嶺については、赤城山、牛伏山、城山等の諸説あるうち、御荷鉾山とする群馬県多野郡誌の一説、及び豊田八十代説が一番実情に合している。上野三碑の一たる多胡碑のある御門部落から見ても、多胡の入野と考えられる大沢川の谷の奥に、美しい円錐形の山頂を示すこの御荷鉾山(吉井町や多胡部落附近ではミカボ山という)と西御荷鉾山をさすらしい。こもその意)は、まことにこの歌の趣にふさわしい。東御荷鉾山はわずかに低いだけだが、山姿に目立つものが乏しいのである。

二十数年前に多胡碑、吉井、多胡部落、大沢川沿いの谷と歩みつ、三四一一の歌の趣は、この辺から西御荷鉾山を仰いだ感じに違いあるまいと思つたことだが、今、この緑荳の一角に立つてみて、ここからの西御荷鉾山の姿も、思いの外に趣深いことを知つた。頂に綱をつけて引張り寄せようという、古代人らしい稚氣を許すような、ぱつかりとした、おおらかな味が、この山の姿にはあるのだ。多胡方面からの歌たることを否定するのではなく、この歌は、この

緑荳のあたりからも、ほぼ同様な親しみ深い感じて、同じ峰頭を仰ぎつつ歌われたらうというのである。今紅葉した闊葉樹と黒い針葉樹林とおおわれた円つこいその峰頭の上に、澄み切つた青空が輝き、白い雲がちぎれている。

稲荷山古墳のさらに北にある七輿山古墳にも登つてみたが、ここでは前程の感銘が得られなかつた。すでに冷たくなりはじめた風の中を鮎川橋に出、バスで高崎駅について、家路をたどつた。

限定出版 在庫少

鹿持雅澄と萬葉集

鴻巣隼雄著 ¥九五〇円

国文学私論

塚本康彦著 ¥三六〇円

千代田区西神田二ノ二九

桜楓社出版